

ミドルリーダーグループによる中学校国語科の授業づくり

研究代表者：須佐宏（和歌山大学教職大学院）

共同研究者：北垣有信（和歌山市ミドルリーダー研究アドバイザー）、南方美紀・岩崎朝蔵（和歌山市教育委員会）、北村凌（和歌山市立伏虎義務教育学校）、田村圭史郎（和歌山市立紀伊中学校）、北口沙季（和歌山市立河北中学校）、植田悠（和歌山市立貴志中学校）、花岡資人（和歌山市立有功中学校）

1. 研究の趣旨

本研究は、「中学校における国語科の授業改善」をテーマに、令和4年度から実践研究に取り組んできた和歌山市のミドルリーダー研修グループ（共同研究者：北村・田村・北口・植田・花岡）からの研究協力依頼を受け、共同して研究を行ってきたものである。研究経過を以下に述べる。

2. 研究の経過

和歌山県内、特に筆者がこれまで頻繁に関わってきた和歌山市の小学校の国語教室では、近年、主体的・対話的で深い学びを実現する対話型の授業への授業改善が促進されている。文部科学省が毎年行っている全国学力・学習状況調査でも、和歌山県の小学6年生の国語科の平均正答率は、令和5年度までの過去5年間、概ね全国平均もしくは、全国平均を少し上回る結果となっている。また、中学校においても、個人レベルでは、上記のような国語科授業への改善に熱心に取り組もうとする教員が見られるようになってきている。しかし、前出の調査結果によると、和歌山県の中学3年生の平均正答率は、全国平均との差がまだまだ大きく、令和5年度の調査でも、約3ポイントの差があるとの報道がなされている。ⁱ

そんな和歌山の状況を踏まえ、和歌山市立教育研究所は、「中学校における国語科授業の改善が今日的な重要課題である」と判断し、令和4・5年度の2年間で研究を行うミドルリーダー研修グループのテーマを「中学校国語科の授業づくり」と設定した。そして、国語科の授業づくりに個人として熱心に取り組もうとしている5名の教諭による研究グループを立ち上げ、研究アドバイザーに元西脇中学校校長で、長く中学校の国語科授業研究に携わってきた北垣有信氏を招聘して研究をスタートさせた。

同教諭らは、「まずは互いの授業を参観しあう中で、どんな授業改善が必要なのか見定めよう。」と話し合い、相互参観と授業カンファレンスを重ねていった。令和4年度から行ってきた授業実践は次のとおりである。

【第1回】

期日	令和4年7月1日（金）	学校名	伏虎義務教育学校	授業者	北村凌
教材名	主教材「百科事典少女」（東京書籍）・副教材「握手」（光村図書）				
単元名	君たちの意見で教科書が変わる？～小説の魅力を批判しよう～				

【第2回】

期日	令和4年7月12日(火)	学校名	紀伊中学校	授業者	田村 圭史郎
教材名	絶滅の意味(東京書籍)				
单元名	「ここが主張」にはワケがある!~ちょっと、木を見ず、森を見てみない?~				

【第3回】

期日	令和4年10月31日(月)	学校名	貴志中学校	授業者	植田 悠
教材名	「矛盾」(東京書籍)				
单元名	「矛盾」~デジタル紙芝居で学ぶ「故事成語」~				

【第4回】

期日	令和4年11月2日(水)	学校名	伏虎義務教育学校	授業者	北村凌
教材名	「故郷」(東京書籍)				
单元名	「故郷」で学ぶ人間論・社会論~投書を使って世の中に自分の考えを発信しよう~				

【第5回】

期日	令和5年2月6日(月)	学校名	有功中学校	授業者	花岡 資人
教材名	「そこに僕はいた」(東京書籍)				

【第6回】

期日	令和5年1月23日(木)	学校名	河北中学校	授業者	北口 沙季
教材名	「根拠を明確にして書こう」(東京書籍)				

【第7回】

期日	令和5年6月14日(水)	学校名	貴志中学校	授業者	植田 悠
教材名	「考えを比べながら聞く」(東京書籍)				
单元名	「意見」と「根拠」~考えを比べながら聞こう~				

それぞれの授業づくりや授業の感想を伝え合うなかで、「どんな力をつけるべきかをもっとはっきりさせる必要がある」「指導事項をどう解釈するかで目指す姿が変わるのではないか」といった意見が出され、指導事項を明確に意識して授業づくりを行うことの重要性が浮き彫りになった。そこで、改めて「国語科における授業づくりの流れ」を考え直し、図式化により整理した。(図1)

指導事項を決め、生徒の実態を踏まえて指導事項を達成した姿を具体化する。そのうえで教材の扱い方や言語活動を構想することを表現する形にまとめた。これまで教材や言語活動を中

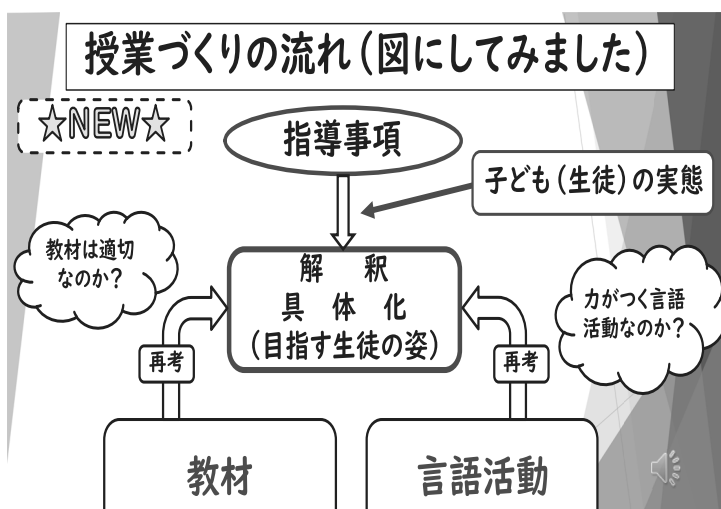


図1 国語科における授業づくりの流れ

心に構想していたが、指導事項ベースで授業づくりを行うことで、教師のねらいが明らかになり、より生徒に力がつくのではないかと考えた。

上記の流れを確認した上で授業をすることにより、自身の日々の授業改善に手ごたえを感じるようになっていった研究メンバーから、新たな提案がもたらされることとなった。それは、毎年11月に和歌山市内の中学校の国語科教員全員を参加対象にして和歌山市国語教育研究会が行っている公開授業研究会（和歌山市内の2校で持ち回り開催）の授業づくりに、研究メンバーが2グループに分かれて協力者として関わり、上記提案について、授業実践を通して周知しようという試みであった。実際に11月に開催された授業実践は次のとおりである。

3. 実践例 〈和歌山市中学校教科等別研修会：令和5年11月1日（水）〉

研究メンバー5名が協力者として関わった授業実践は、次の2実践である。

3.1. 授業実践

- 授業実践① 学校名：和歌山市立紀伊中学校 授業者：今田風花
单元名：『竹取物語』 続編執筆！～描かれた気持ちを想像すると・・・～
教材名：古文 竹取物語 協力者：田村圭史朗・植田悠・花岡資人
助言者：須佐宏・上原一弥 担当指導主事：南方美紀
- 授業実践② 学校名：和歌山市立東中学校 授業者：木場田愛里
单元名：効果的に表現する
教材名：「正しい」言葉は信じられるか 協力者：北村凌・北口沙季
助言者：北垣有信 担当指導主事：岩崎朝蔵

3.2. 実践の振り返り

上記2実践のうち、本報告書では、紙面の都合、授業実践①を終えた授業者、今田風花教諭による「成果と課題」を以下に引用する。

〔本実践の成果について〕

第一に、教材への視点が変化したことを挙げたい。「この教材であればこの言語活動で行う」という視点で授業づくりを行うのではなく、設定した指導事項に基づいて教材を精査し、教材が指導事項の達成に耐えうるものなのかどうかを吟味するというステップが生まれた。もし、指導事項を達成するに足らなければ、教材の変更を行うか、補助教材を加えることによって教材の強度を増すかなどの手立てを考えられるというような視点がこれまでは無かった。このことによって「この教材でどのように評価するのか」という基準も明確になった。また、今回は、スパイダー討論という手法を用いたが、話し合いの中での発言数や誰の意見に対する発言なのか、話し合いを深めるためには誰と誰に話し合いをもってもらえるのかなど、

主体的・対話的で深い学びへと生徒を導く上での有用性も確認することができたことも成果といえる。

〔本実践の課題について〕

今回の授業づくりを通して、教材研究の重要性を再認識することができた。同教材であっても、取り上げる指導事項が変わればまったく別の授業展開となり、教材の価値がまた違った輝きを放つことに気づかされた。このことを踏まえ、これまで取り上げてきた教材をもう一度精査し、視点を変えることによって新しい授業に生まれ変わらせていくことが課題であると感じている。また、国語科で実施した言語活動を他教科と共有すべきであるとも感じた。そして、その逆の、他教科での学びを活かした言語活動を国語科で取り入れていくという考えも必要なのではないかとも感じた。

4. 共同研究者相互の学び

2年間に及ぶ相互参観ならびに授業づくりの協力者として単元開発、本時案の検討に関わって来た5名の実践研究者が相互に学び合う中で何を感じ、何を学んでいったのかを以下に述べることにする。

互いの授業を参観し、授業づくりについて話し合うことで、変化したことが大きく二つある。一つ目は、教科書に対する意識が大きく変化したことである。これまでは教科書で学ぶ意識しかもっていなかったが、指導事項を中心に考えることで「教科書のこの教材だけで十分か」「もっと他によい教材はないか」と教材を吟味する視点が増えた。このことによって、教科書教材に加えて補助教材を取り入れることが多くなった。教科書教材の代わりに別の教材のみを使用した単元はまだ構想したことはないが、今後そのような単元も組んでみたいと考えるようになった。二つ目は、教材の扱い方が変化したことである。重点的に指導する内容を厳選することで、何を指導するべきかがはっきりとするようになった。その結果、教材の魅力を全て扱うのではなく、今回の指導内容に即した部分のみに焦点を当てて授業をするようになった。何を学ぶかがはっきりとし、生徒も学びやすくなっているのではないかと考えている。今後も楽しく、力のつく授業を構想できるようにしていきたい。(北村)

本研究において、私自身の授業づくりの視点が大きく変化した。当初は教材を見て、言語活動を考え、単元目標及び単元計画を立てていた。そこで最も大切にしていたのは「単元名」である。しかし、「単元名」にこだわるが故に、学習指導要領にある指導事項の確認をおろそかにしてしまい、授業づくりにおいて第一に考えることができていなかった。そのような中で、本研究を進めていくにつれて、私の考えていた授業づくりは全て間違えていたということではないが、本来大切にすべきことを大切にできていなかったと気付いた。それは学習指導要領の指導事項をしっかりと確認し、そこから生徒の姿を考え、単元を構成してくこ

とである。この順番を変えたことによって、見えてくる目標や活動があった。恥ずかしながら、本研究を進めていく中で気付かされた。本研究で気付かされた大切にすべきものを、今までの授業づくりに加え、新たな視点を持ってこれからの授業づくりに励み、本研究で得られた考えや見方をしっかりと活かしていきたい。(田村)

これまでの授業づくりは、教科書に記載されている内容を軸に授業づくりがスタートし、進めていくうちにどのような力を生徒につけさせたいのかという観点が抜け落ち、教科書の内容をどのように理解させればいいのかという方向に進んでしまいがちであった。今回、授業づくりを研究していく中での、最も大きな学びは「指導事項」を中心に据え、授業づくりを行うという考え方を獲得できたことである。実践および意見の交流を行う中で「指導事項」を根本に据えた授業づくりマニュアルを基盤とし、授業づくりを行った。すると「指導事項」を指針にすることでつけさせたい力が明確に設定され、それに基づいて教材選択、言語活動の設定、生徒の実状に適した支援策を講じることが可能になった。煩雑であった授業づくりの課題がポイントに集約され思考がスムーズになったように感じられる。これらのことから、共同研究において「指導事項」を基礎とした授業づくりの手法を獲得できたことが大きな学びであったといえる。(花岡)

今回のミドルリーダーでの授業づくりの取り組みを通じて、「指導事項」への意識が強くなった。これまでの授業づくりを振り返ってみると、行う言語活動を先に考え、そこから指導事項について「それならばこの指導事項が近いな。」というような検討・設定をしていた。結果的に、生徒はもちろん教師である自分自身も、つけたい力・目指す姿が具体的に見えづらくなってしまっていた。すると評価の際にも、重点を置いた指導事項は何なのかが明確化せず、規準がぶれやすくなったり、判断に迷いが生じたりすることがあった。国語科では、1つの教材(作品)に対しても様々な指導事項を当てはめることができる。指導事項を自分なりに解釈し、重点を置く重点指導事項を設定したうえで授業づくりを行うことの大切さに気づき、授業づくりを改善することができた。また、同年代の先生方と、同じ単元での授業実践ができたことも大変勉強になった。お互いに知恵を出し合い、話し合っただけで授業づくりをすることで、これまで以上に生徒の実態や成長した姿をイメージしながら授業づくりをすることができた。(北口)

本研究において、互いの授業づくりに対する悩みや課題を共有することで、研究すべきことが焦点化された。その一つが、指導事項への深い理解である。これまでも、教材研究をする過程で指導事項を意識していたのだが、研究を通して、指導事項と生徒の具体的な姿を結びつけ、言語化し、授業づくりの「核」とする重要性を認識することができた。また、常にその「核」に立ち返り、教材の提示方法や言語活動を吟味することを意識的に行うことができた。より良い授業づくりをしたいという思いで試行錯誤を繰り返してきたが、一つ一つの

授業に対する反省を積み重ねて、次に生かすことができているのか自信が持てなかった。しかし、今回の研修で授業づくりの道筋を形にすることができ、これを木の幹として、共に研究を進めてきた先生方から学んだことを枝葉のように広げて、子どもたちが国語を進んで学びたくなるような授業を作っていきたい。(植田)

5. 本研究の成果と課題

本研究を通じた成果と課題についてそれぞれ2点ずつを述べることにする。

成果の1つ目は、授業実践者として日々国語の授業づくりに関わる5名の共同研究者が共通して「指導事項に着目すること」で「授業づくりにおける視野が広がった」と認識していることである。第三者的に見れば、「何をいまさら」と言われてしまうかもしれないが、授業で扱う教科書教材の前面に指導事項がそのまま記載されることない国語科の授業現場において、それは往々にして起こり得ることである。そんな中で、本研究を通して、各授業実践者が、指導事項を中心にすることで教材を吟味する視点を得ることができ、授業を作る際に「何ができるようにすればよいのか」を考え、授業のねらいをはっきりともって日々の授業実践に取り組み始めるようになってきていることは成果といえる。

2つ目は、3章で述べたように、和歌山市中学校国語教育研究会と連携した授業づくりを協働で行えたことである。和歌山市内の中学校で国語科を指導する全ての教員が参加する教科等別研修会において、その研究授業の教材研究から単元計画、そして本時案の作成にも研究メンバーが積極的に関わり、授業者と一緒に授業づくりを行うことができた。自校で同じ教材の授業を複数の教員が行ったり、異学年にも国語科の授業をする教員が多数いたりする小学校とは違い、中学校では、複数の教員で同じ教材について協働で授業検討をするという機会は極めて少ない。今回のことをきっかけに複数の教員で協力して授業づくりを行う文化が醸成され、今後も継続されるならば、授業改善が大きく進む可能性がある。

一方、今後の課題として次の2点を挙げておきたい。

1つ目は、取り上げた指導事項を達成するために効果的な言語活動を設定することの難しさである。授業者のひとは、自身の実践について、「単元終了時において、設定した言語活動が指導事項に適したものになっていなかったのではないかと反省することがあった」と述べている。単元をスタートする前に、設定した言語活動が、本当にその指導事項を達成するのに適切なものになっているのかを確認が必要であると言える。

もう一つは、指導事項の解釈に違いがあることである。教員によって同じ指導事項であっても解釈の違いが表れることが明らかになった。抛り所となるのは学習指導要領解説国語編の記述内容ということになるが、その文言の解釈にも多少の幅がある。全国学力・学習状況調査の問題等を分析し、指導事項に関する理解を深め、また、考えを共有していく必要性があるのではないだろうか。

ⁱ https://uub.jp/pdr/e/aaa_7b.html 都道府市区町村『全国学力学習状況調査』